

会 告

昭和六二年度史学研究大会および総会は、予定通り、十一月二日(月)午後一時より楽友会館において開催されました。

公開講演は鎌田元一、越智武臣の両氏により左記の演題で行なわれ、盛会裡に終了しました。

平城遷都と慶雲三年格

鎌田元一氏

歴史と世代

——イギリス・ルネサンス考——

越智武臣氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋期定例の理事評議員会において、次の各氏の役員新任が承認されました。

理事 服部春彦(評議員より)

評議員 熱田 公、河音能平、

金田章裕

昭和六二年度

史学研究大会講演要旨

平城遷都と慶雲三年格

鎌田元一

大宝令施行後間もない慶雲三年(七〇六)二月十六日、歳役の庸が半減され、その替りに「公作之役、不足三庸力」場合に備えるとの理由で、新たに「百姓身役」の制度が定められた。私見によれば、この政策は恒常的な庸の半減と引替に、造都などの大規模な造営事業の際には、令制の枠を超える大量の無償の労役を徴発しようという計画されたもので、当面具体的には平城京の造営を念頭において立案されたものである。藤原から平城への遷都計画がいつごろ具体的な政治日程に上ってきたかについては、普通文武天皇が王臣五位以上に遷都のことを議せしめた慶雲四年正月、遡っても前年十一月に文武が不予を理由に讓位の意志を表明して以来、元明の即位が準備される中でのこととするのが一般であろう。しかし慶雲三年格立制の意図が右述の如きものと

すれば、遷都計画は、遅くともまだ文武の急逝・元明の即位など予想もされなかった慶雲三年初頭にはすでに固まっていたことになり、ことは従来論議の多い平城遷都の理由ともかわって重大である。この慶雲三年格の「百姓身役」と平城京造営との関連については、すでに長山泰孝氏の指摘があるが『律令負担体系の研究』、問題の関心が令制歳役と「百姓身役」の制度的関係に置かれているため、それは特に論拠を挙げない簡単な推測にとどまっている。詳細は別稿に譲らざるをえないが、同日西海道諸国のみが庸を全免され、替りに一九日間「筑紫之役」を課されたのも大宰府諸施設の造営のためと考えられる。そして「若公作之役、不足三庸力者」というような表現とは裏腹に、「百姓身役」は直ちに慶雲三年の冬から連年にわたって差発されようとしたのである。しかしその年の十一月、疫疾が全国的に猖獗を極める中、文武天皇は不予に陥り、計画は一時見合わせられざるをえなかった。『統日本紀』和銅元年(七〇八)二月戊寅条に収める元明天皇の著名な遷都の詔は、実質的にはその再開を告げるものであったと言えよう。

歴史と世代

——イギリス・ルネサンス考——

越智 武臣

歴史とは、所詮時空のなかに、物事を相対化して行くことではなからうか。しかし、永年同じ処にいと、過ぎ行くものは、ただ時ばかりである。とともに、年々歳々人は新たになって行く。歴史家たるもの、いやでも世代というものを考えざるをえない。歴史における世代とはいかなるものか。それは歴史をどう変容させてゆくのか。折りふし心に感じたそんなことを、表記の時代について考えてみたのが、この講演の趣旨である。

それに先立ち、イギリス・ルネサンスとはいうが、一体全体それはどういう時代であったのか。とくにその最盛期と目されてきたエリザベス時代は、ここで私は些か世の通念に異を立てることになったが、その通念によれば、時は万事美々しき時代、国勢隆々として、内に国教の統一成り、大國スペインはその足下に慍伏し、英船四海に雄飛して、文運また隆盛を極めた、と。か

つての大英帝國、樂天的ヴィクトリアニズムの高みから眺めたこのようなルネサンス史観は、教科書的叙述には今日なおその名残りを留めているが、まず訂正しなければならなかったのが、このような史観であった。早い話、今世紀の諸研究は、この時期が、かつてこの国が経験した未曾有の経済的不況の時代であったことを明らかにしている。政治的にみても、超大国スペインとの関係は、父王ヘンリの行なった宗教改革以来、日を追って対立の度合いをつよめ、一度はこれに併呑され、いつまた完全に併呑されるかも知れぬ薄氷を踏む思いの日々、それがエリザベス朝なるものであった。まづわれわれはこのことを追体験してかかる必要がある。

次に、配布した人名表(省略)を眺めてもらいたい。これらはエリザベス朝とともに忘れない大小の名前。武人あり、廷臣あり、詩人あり、作家がある。しかも彼らは、一人であらゆるジャンルをカヴァーする。それも時代の個性というものが、ただここでは一人二人、突出した名前としてシェイクスピア、ベイコン、シドニー、スペンサーらを指摘しておこう。かのエリザとい

う名の妖星を、遠い歴史の夜空に輝かせたのは、あるいはこれら群星の光の束だったとは言えないか。しかし、今問題なのはこのことではない。注意すべきは、これら群星の生まれた年である。不思議なことに彼らすべてがすべて一五五〇年初めから六〇年半ばにかけてその生を享けている。とすれば、「エリザベス朝的なもの」、言葉を替えていえば、この国のルネサンスは、一つの世代現象と見られはしないか。今はその中間をとって、これを「一五六〇年世代」と呼ぶことにしておこう。

ところで世代というものは、オーヴァラップしているものである。一つの世代の上にもう一つ世代が重なる。だからこそ、また世代でもある。それこそ別表に示した面々、つまりエリザベスを筆頭に、国政の枢機に携った人々。彼らは大方一五三〇年代の生れ、年令差からいって正に親子のそれに当る。一五三〇年代といえば、ほかでもない宗教改革の時代、猫の目のように変った政權、イデオロギーの刃間をとにかく生きぬいてきたのが彼らであった。いまこの国にとっては乾坤一擲の国難スペイン無敵艦隊の年一五八八年をとれば、彼らはい

ずれも五〇歳代から六〇歳代、彼らの半生がいやという程教え込んだものは、無暴や野心が何を結果したかということであった。どれだけ多くの野心家が断頭台の露と消えたか。とすれば、かの哲学者ベイコンの父ニコラスが、ゴーハムベリ邸の門扉に掲げさせた標語、「中流は固」(mediocria firma)こそが、その処生の哲学であった。石橋を叩いて渡る、いや叩いても渡らぬ「中道」(sa mediam)は、たんにこの国の教会政策だけでなくなかったのである。この世代が位人臣を極めながらも、なお「サー」の位に甘んじたことは別表も示す通りである。

しかし、子供の世代、一五六〇年世代の見る眼は違った。野心を慎め、中流に徹せよというが、野心なくして前世代は、いかにして今日の地位を築き得たか。次の世代に萌したおのずからな疑念であったにちがいない。もはや詳説も出来ぬが、彼らが生れ落ちたジェントリ家族、とくにその次三男につきまとう家族的社会的な隘路もあった。しかも世は不況の時代、いったいどこにその吐け場を求めたらよいのか。一六世紀末を彩った反乱の数々、対スペイン戦、ネーデルラント戦、アイルランド戦、海外新天

地への冒険、清教主義、極端なカトリック主義、国教主義にいたるまで、すべては新しき世代の旧世代に対するギリギリ結着の自己表現であった。この世紀末もまた暗いのである。としてみてしかし、人生果して何の意味があるのか。そう問う人がいた。『トクベス』の最後の台辞である。「人生はただ歩きまわる影、あわれな役者。」けだし、かつての新世代、今は中年となった人間の自嘲の声であったろうか。

編集後記

例年に比べて暖かい冬ようですが、会員の皆様お元気で過ごしてでしょうか。第七一巻一号をお届けします。

本号は東洋史、国史、西洋史、西南アジア史(以上論説)、現代史(研究ノート)と、あたかも人文地理学、考古学を除く「史学」特集のようになりました。少々欲張ったため一八〇ページを越える厚さになり、会計担当者から苦情が出そうですが、読者の皆様には分量、内容ともに読みごたえ十分の号をお届けできたのではないかと思います。十分にご吟味下さい。(英)

昭和六二年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の受領について

昭和六二年度の史林の刊行費の一部として、文部省学術国際局から昭和六二年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付を受けております。

一九八七年十二月二十五日印刷 定価一〇〇〇円

史 林 第七一巻第一号(通巻第三四七号) 送料五〇円

京都市在京区吉田本町
京都大学文学部

発行人 史 学 研 究 会

振替京都七五一二五五番

理事長 藤 縄 謙 三

京都市下京区七条御所ノ内中町五〇

印刷所

中村印刷株式会社